

公開講座 開催報告

今年度の公開講座では、音楽・アート・絵本などの子ども文化を切り口に、「子どもの想像力・創造力を育む地域づくり」について、子育てにかかわる多様な人たちの交流・意見交換の場となることを目指しました。当日は、雨天にもかかわらず多数ご参加いただき、会場は活気にあふれていました。

地域の子ども文化を拓く ー 音楽・アート・絵本の現場から ー

オンライン
併用の
ハイブリッド
開催

令和5年
12月3日(日)
13:30～16:30



第1部 基調講演



「子どもの創造的想像力を育む」

新潟大学大学院 教授 中島 伸子氏

想像力(イマジネーション)と創造力(クリエート)の発達について、発達心理学でわかっていることの中から重要な点について課題提供したいと思います。

想像力とは「今、ここで見たり、聞いたり、触ったりできないものを思い浮かべる能力」のことです。想像

的活動の基盤は象徴機能と言われています。象徴機能とは「何か(指示対象)を別物(シンボル＝言語、記号、事物、動作)で表す心の働き」です。こうしたシンボルを使えるということは、今ここにはないものを表すことで「自由を獲得する」こととなります。想像の素材には、これまでの経験や既存の知識が必要となります。経験や既存の知識が豊富であれば、想像世界が豊かになります。

想像力は、日頃の遊びや周りの人との会話から育むことができます。本やテレビから得る情報は間接的な情報で、物事の一面を伝えることしかできません。身の回りのものや人とじっくりと五感を通して直接かかわること、その際に、自らの経験、知識をもとに思考を巡らせることが重要です。子どもが想像世界を生み出すのに必要な経験や既存の知識は子どもの中にすでにあります。それを大人がうまく引き出し、使えるように支援をする。正解を教えるのではなく、子どもに考える余地を残す。そのための具体的な良い例として「おてて絵本」があります。おてて絵本とは、新潟の絵本作家サトシンさん発案の遊びで、手を絵本に見立てて開き、思いついたことをお話ししていく遊びです。小さな子どもは思いついたことをごく短くつぶやくことが多いです。親は、子どもの述べたことを少し言い換えたり、合いの手を入れたり、うまい質問をしたりします。このようにして子どもの中からすでにイメージとしてあるものを引き出し、大人と子どもが会話のキャッチボールをするところにストーリーが出来上がります。子どもが幼いほどこのような大人の支援が大事になります。やがて言葉、シンボルを扱う認知能力が発達すると、子どもが一人でまとまりのあるお話を作れるようになっていきます。子どもの発達に合わせてだんだん上手に支えを外していくことも大人の大事な役割です。また、どの年代の子どもに対しても幼児教育の方法がヒントになります。幼児教育では、自発的な活動としての「遊び」を通しての指導と環境を通して行う教育を大切にしています。個々人の興味・関心を最大限に尊重し、遊びに没頭する中で、意欲や思考力、社会性を発達させること。危険でない限り、できるだけ自由に活動できるように見守り、子どもの「やりたい」を大切にすること。そして、子どもたちが環境におかれたものと出会い、そこから関心・興味をひかれることに取り組むということを通して教育がなされます。試行錯誤の過程や好奇心・探求心の発揮される過程を重視しており、放任ではなく、子どもの様子を見守りながら、適切な支援をしていくことです。子どもの創造的想像力を育むための保護者の役割は、環境づくりと適切な援助です。

ました。本事業の目的は、新潟県立大学子ども学科の学生約100名が主体となり、地域の子どもと家族向けの「観客参加型」コンサートを開催し、地域における文化芸術の発展に貢献することです。10年間で出演した学生数は延べ860人、観客総数は延べ6,105人、終演後の観客アンケート回答者は2,022人です。アンケートの内訳は、99.8%が「良かった」、100%が「今後も続けてほしい」でした。この結果から、多くの方を魅了し、地域に愛されているコンサートであると言えます。音楽のコンサートというのは瞬間芸術で、だからこそその瞬間に人々の心に深く刻まれて、人々に生きる力を与えることができ、地域や社会全体を活性化していく力になると思っています。



発見・表現・交流を体験しよう

～新潟市こども創造センターの役割～

新潟市こども創造センター サブマネージャー
田村 輝美氏

こども創造センターは2013年に文化施設として開館しました。本施設の設置目的は、「未来を担う子どもたちが、本市の豊かな自然を活かしながら、多くのの人々との交流や様々な創造活動・体験活動を通して、子どもたちが本来持っている『自ら生きる力』を伸ばし、他者との違いを理解し『共に生きる力』を育むための機会と場を提供すること」です。体験事業として大きく次の4つの事業があります。

- ①あそび・ものづくり常設事業
- ②外部サポーター講師による体験講座
- ③センター職員の企画による体験講座
- ④学校・園の校外学習で利用される団体体験プログラムの学習

施設の各階に絵本や図鑑の設置がされており、子どもたちは物語を楽しむだけでなく、絵本の中の色、デザイン、言葉、読み聞かせ、ひたすらにページをめくるなど、思い思いに絵本の世界を感じ、親しんでいる様子が見えがえします。また、スタッフによる読み聞かせ劇も実施しています。



新聞社発

子どもたちの創造力を育む場づくり

新潟日報社総合プロデュース室 プロデューサー
畑川 克久氏

新聞社が取り組む子どもたちの想像力を育む事業を2つご紹介します。1つ目は「絵本ワールドinにいがた」です。2012年に新潟県立大学で初開催しました。人気絵本作家による講演会やわくわく工作&アートコーナー、県内ボランティアによる絵本読み聞かせコーナーを行いました。2015年から2022年までは、新潟日報社が主催し、新潟県立大学の特別協力、新潟県立図書館などの協力で開催しました。2つ目は「新潟県ジュニア美術展覧会」です。1961年より開催され、今年で54回目になりました。新潟県内の学校(幼稚園・保育園・こども園、小学校、中学校、特別支援学校)から出品を受け付けており、約2万3千点の応募作品の中から、専門家による審査により、約1,300点の入賞作品(特賞・優秀賞・奨励賞)が選定されます。入賞者は新聞紙面やwebサイトで紹介、表彰式も行われます。この他にも、「にいがた、びより」という新潟の子育てやお出かけ情報をお届けする新潟日報社が運営する子育て世代向けのニュースページがあります。

第2部 事例発表 「地域の子ども文化を盛り上げる」



大学と地域との連携事業

～「ファミリーコンサート」「キッズコンサート」10年の軌跡～

新潟県立大学人間生活学部 子ども学科教授
石井 玲子氏

2014年度より新潟県立大学と江南区文化会館が連携して「ファミリーコンサート」、2022年度から秋葉区文化会館と連携して「キッズコンサート」が始まり

基調講演：新潟大学大学院教育実践学研究科教授・発達心理学者	中島 伸子氏
事例発表：新潟県立大学人間生活学部教授	石井 玲子氏
新潟市こども創造センター企画運営グループサブマネージャー	田村 輝美氏
新潟日報社総合プロデュース室プロデューサー	畑川 克久氏
長岡造形大学デザイン学科准教授	平原 真氏
新潟市東区長	斉藤 淑子氏（代理発表 澤田 紀子氏）
コーディネーター	新潟県立大学人間生活学部准教授 神谷 睦代

13:30	開会・開会あいさつ
13:35～14:25	第1部：基調講演「子どもの創造的想像力を育む」 中島 伸子氏
14:25～15:40	第2部：事例発表「地域の子どもの文化を盛り上げる」 石井 玲子氏／田村 輝美氏／畑川 克久氏／ 平原 真氏／澤田 紀子氏
15:50～16:20	ディスカッション「子どもの想像力・創造力を育む地域づくり」 進行：神谷 睦代
16:20～16:30	質疑応答
16:30	閉会あいさつ・閉会

創作活動とワークショップ

長岡造形大学デザイン学科准教授 平原 真氏

長岡造形大学の取り組みとして、こどもものづくり大学校があります。「まなび」と「あそび」の観点から、ものづくりを通して豊かな感性と創造力を育むことを目的に、小学生を対象としたワークショップです。また、私の創作活動とワークショップの事例をご紹介します。立体造形作品として発表した「Yeda」は、Y字の形の末端に磁石が入っており、磁石で勝手にくっつき偶発的な立体造形ができるという特徴のある積み木のおもちゃです。採集ワークショップで展示し、多くの作品ができました。ほかにも「Yeda Petanko」、「幽水庭」、「偏光板ワークショップ」など、数々のワークショップを開催しています。作家として心がけていることは、単にやり方をなぞるだけではなく、子どもたちが創造性を発揮できるような幅をもたせること、ワークショップの時間で終わりでなく、家に持って帰ってから自分で工夫して広げられたり、次の学びにつながったりすることをワークショップとして実施することです。

東区における子どもの文化的活動に関する取り組みなど

新潟市東区長 斉藤 淑子氏
（代理発表 東区地域課長 澤田 紀子氏）

今年度からスタートした新しい総合計画では10の重点戦略を掲げており、重点戦略⑦では「子どもと子育てにやさしいまちづくりと新潟の未来を担う人材の育成」を掲げ、社会全体で子どもと子育てを支える取り組みを重点的に行っていきます。東区における子どもや文化に関する事業についてご紹介します。産業のまち東区「オープンファクトリー」では工場見学やものづくり体験を実施しました。東区歴史文化プロジェクトでは区内中学校体育祭応援パネル・美術部作品展示の実施や新潟県立大学人間生活学部子ども学科の学生さんが作製したオーナメントをクリスマスツリーに飾り付けて東区役所に設置しました。ゆめ・のせ・あがれ寺山こい来いフェスタでは区民の皆様とともにこいのぼりの掲揚や地域コミュニティ協議会、東区自治協議会、小中学校などを中心とする実行委員会による各種イベントを実施しました。東区は「い〜てらす」「こども創作活動館」「わいわいひろば」など子育て施設が充実しており、東区2km子育てトライアングル魅力発信では、東区子ども文化祭、子ども祭りなどを開催しました。

参加者の声（一部）

- 様々な観点から芸術・文化活動について知ることができて、新潟には色々な資源があることが分かり、たくさんの子どもたちに活用してほしいと思った。
- 子どもの創造性を育むために大切にしたいことを改めて自分の中で考える良いきっかけになりました。
- 未来の子ども達のため、同じ方向をみながらいろいろな立場の連携で長期的な取り組みが必要であることを学べました。
- 芸術、音楽、絵本等どれもこれも興味があり、とてもワクワクさせていただきました。

メディア等

本公開講座は、新潟市東区の区だよりに掲載されました(2月4日号)。

ディスカッション 「子どもの想像力・創造力を育む地域づくり」



進行

神谷

「地域における子どもの文化を拓くという視点で、それぞれの立場からこれからの課題について伺いたい。」

石井

「ファミリーコンサートなども予算がないと実施できないこと。芸術に対する理解が行政や企業にあってほしい。学生たちも本当に子どもたちに伝えたいという熱い思いで行っている活動なので、継続的に実施できるような支えをいただけたらいい。」

畑川

「新聞社にも潤沢な予算があるわけではない。いろいろな方と連携してものごとを作っていくときに、企業様含めて事業の趣旨に賛同していただける方を集める役割がある。子どもは地域の宝。子ども時代にいろいろな体験をすることで子どもの人生が変わってくるのではないかな。そのような機会をつくるのが新聞社の役割なのかなと思う。」

田村

「また来たいと思っていただける環境整備が課題。例えば木のおもちゃを通じておもちゃ、木、自然に触れてもらう。用具の点検など経年劣化も悩ましいことで、行政さんと相談しながら進めている。工作の材料の補充で新潟日報社さんから新聞を頂いている。想像を膨らませる仕掛けあそびなどもブラッシュアップしていかなければと思っている。」

平原

「表現したいことは一つ。どんな方法をとるかに関してはその都度一番いい方法を選択している。違う視点を持つためにいろいろな領域を横断することが創作の立場からも重要であり、ほかのことにも応用できることだと思う。」

澤田

「大人が子どもの相手ができる社会づくり。大人に心の余裕がないとなかなかそういう時間が作れないので、そこが行政の仕事なのかと思う。予算については、少子高齢化などで厳しくなってきたり、継続が大切ということで、東区においても検討していきたいと思う。」

総括

中島

「地域の中に、子どもたちにとってのイメージの世界を作っていく様々な活動や場という資源がたくさんあると感じた。課題について伺い、予算、連携、クロスオーバーが大切。そのためには意義をわかりやすく伝えていくことが重要。大事なポイントは二つあって、一つは学校や園ではできないこと等、どのようなことをしているのかをアピールしていくこと。もう一つは学校や園と地域がつながってより豊かな保育や教育にしていくこと。そのためには、学校や園のクラスの子どもたちが一緒に体験をしに行き、活動を共有することが大切になると感じた。」

進行

神谷

「このディスカッションでは、お互いに情報を共有できるとともに、それぞれの取り組みについて連携するという可能性も見出すことができた。この度の公開講座が、子どもの文化を拓く、また、子どもの想像力・創造力を育む地域づくりの起点となることを願いたい。」